雨を聴く詩の系譜 -
蘇軾・蘇轍兄弟の「夜雨對牀」に至るまで -

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 愛, 小谷, 優瑠, HARADA, Ai, KODANI, Suguru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069051

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

雨を聴く詩の系譜

―蘇軾・蘇轍兄弟の「夜雨對牀」に至るまで―

原田　愛・小谷　優瑠

Genealogy of Poetry Listening to the Rain :
Up to the Poems “Listening to the Rain at Night with Beds side by side” Written by Su Shi and Su Zhe

Ai HARADA・Suguru KODANI

はじめに

詩人は、様々な自然の景物に対したとき、思いを巡らせたり、物思いを始めたりして詩を詠むことがある。その自然の景物の一つに「雨」が挙げられる。北宋の代表的な詩人である蘇軾（字は子瞻、号は東坡居士、一〇三六～一一〇一）が、弟の蘇轍（字は子由、号は潁濱遺老、一〇三九～一一一二）との間で生涯を通じて「夜雨對牀」の詩を応酬したことは有名である。その端緒については、蘇轍「逍遙堂會宿二首」の序文に詳述されている。

轍幼從子瞻讀書、未嘗一日相舍。既壯、將遊宦四方、讀韋蘇州詩、至「安知風雨夜、復此對床眠」、惻然感之、乃相約早退、爲閑居之樂。故子瞻始爲鳳翔幕府、留詩爲別、曰「夜雨何時聽蕭瑟」。轍　幼きとき子瞻に從ひて読書し、未だ嘗て一日として相ひ舍（お）かず。既に壯なりて、将に四方に遊宦せんとするに、韋蘇州の詩を読みて、「安んぞ知らん　風雨の夜、復た此に対床して眠るを」に至り、惻然として之に感じ、乃ち早に退きて、閑居の楽を為すことを相ひ約す。故に子瞻　始め鳳翔幕府と為りしとき、詩を留めて別れと為して、「夜雨　何（いつ）れの時にか蕭瑟たるを聴かん」と曰ふ。

蘇轍「逍遙堂會宿二首幷敍」（『欒城集』巻七）[1]

つまり、彼らは中唐の詩人である韋應物（字は義博、七三六～七九〇頃）の詩句に感銘を受け、官途を終えた後はともに隠棲し、「夜雨」を聴きながら、「對牀（寝床を並べ）」て語り合って過ごそうと約束したというのである。この彼らの「夜雨對牀」詩の交遊について、かの幸田露伴（一八六七～一九四七）は次のように絶賛している。[2]

（韋應物の詩句に至って）始めて離合に感慨するの意を發し、兄弟仲好く相共に日を送る此樂しさは人生の幸福、和易閑適、何物にも換へんや、然も世に立ち功を建てんとすれば、官途に奔走して、東西に別離もせねばならぬのは自然のことである。これも亦人間のおのづから當に然るべきことである。が、早く峻險な功名の路を退いて、清談閒遠の活計を遂げ、共に熙々

令和4年10月1日受理

雍々の生を送りたいものだと、兄が言へば弟も和して、此の善良にして澹遠な性質の二十六と二十三との兩青年詩人は、旅館の一室に秋夜の雨聲を聽きながら、面々相對し、眼々相視て、おとなしい、やはらかな、清らな、淡い感情を取かはした。馬肉で惡酒を飲んで、酗醉して怪氣焰でも擧げるのを誇りとしても不思議は無い年頃の二人が、淋しき客窓の風雨のためとは云へ、又これも善良閒澹の詩人韋蘇州の詩に動かされたためとは云へ、此樣な感想を語りかはしたといふことは、何と品格ある、清らな、美しいことであらう。

しかし、実際にはどのような「雨」の詩の系譜を経て、この蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」に至ったのかは、未だ明らかにされていないところもある。本論では、どのようにして蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」に至ったのかについて、「雨」を感じ取る詩、殊に聴覚を働かせる詩の系譜を辿りつつ、明らかにしたい。

第一章　『詩経』から六朝時代までの雨の詩

まず、最古の「雨」を詩題とする漢詩を挙げたい。それは、『詩経』鄭風「風雨」である。

風雨淒淒　風雨　淒淒たり、
雞鳴喈喈　雞鳴　喈喈たり。
既見君子　既に君子を見れば、
云胡不夷　云胡ぞ夷（たひ）らかならざらんや。

風雨瀟瀟　風雨　瀟瀟たり、
雞鳴膠膠　雞鳴　膠膠たり。
既見君子　既に君子を見れば、
云胡不瘳　云胡ぞ瘳（い）えざらんや。

風雨如晦　風雨　晦の如し、
雞鳴不已　雞鳴　已（や）まず。
既見君子　既に君子を見れば、
云胡不喜　云胡ぞ喜ばざらんや。

このように、激しく降る「風雨」が繰り返し描写されている。伝統的に『詩経』の収録作は当時の社会や政治を反映して詠まれたものと見なされた。そのため、「風雨」の詩序にも「風雨、思君子也。亂世則思君子不改其度焉（風雨は、君子を思ふなり。乱世には則ち君子の其の度を改めざるを思ふ）」とある。荒々しく吹き荒れる「風雨」は乱世を喩えており、その乱世の中で節を曲げない君子の出現を希求しているのである。

そして、六朝時代には、「雨」は主に農事に恵みをもたらすものとして詠まれるようになった。それが「喜雨詩」である。矢嶋美都子氏の「豐作を言祝ぐ詩―「喜雨」詩から「喜雪」詩へ―」[3]では、六朝時代から唐代までの「喜雨詩」、あるいは「對雨詩」の変遷について論じており、六朝時代の「喜雨詩」の主な型は、次の四項目であるとされる。

A、天（天子）の徳を稱える表現
B、雨が降る豫兆
C、雨が降っている樣子
D、秋には良い穀物が收穫されるだろうという五穀豐穰を言祝ぐ表現

つまり、「喜雨詩」は雨が降ることを天からの恵みとして喜ぶことを主眼とし、そこから天子の徳を称えたり、穀物の豊作を言祝いだりする。現存する「喜雨」と題する詩で最も古いものは、三国魏の曹植（字は子建、一九二～二三二）によるものである。

天覆何彌廣　天の覆ふこと　何ぞ弥広なるや、
苞育此羣生　此の群生を苞育す。
棄之必憔悴　之を棄つれば必ず憔悴し、
惠之則滋榮　之を恵めば則ち滋栄す。
慶雲從北來　慶雲　北より来たり、
鬱述西南征　鬱述として西南に征く。
時雨中夜降　時雨　中夜に降り、
長雷周我庭　長雷　我が庭を周る。
嘉種盈膏壤　嘉種　膏壤を盈ち、
登秋必有成　登秋　必ず成る有らん。

曹植「喜雨」（『藝文類聚』巻二・天部下・雨）

即ち、一句目から四句目までは、万物を覆う「天」について詠んでおり、「天」はあらゆる生物を萎れさせたり、慈しんで茂らせたりするという。五句目から八句目までは、その「天」から生まれた「雲」と「雨」に言及している。瑞祥を表す「慶雲」が北からやって来て、湧き起こりながら西南に流れゆくのだが、その雲から相応しい時節に降るという「時雨」が夜半に降り注ぎ、「雷」が庭にまで響き渡った。九・十句目には、その雨によって、「嘉種」、つまり実った穀物が肥沃な土地にあふれ、秋には豊作になるだろうと詠んで、詩を結んでいる。この詩は、先述した四項目の定型に当てはまっており、その詩題からも、降雨を喜び豊作を祈願する「喜雨詩」あることは間違いない。

更に、六朝時代には、「喜雨詩」以外の雨の詩もあり（現存するものは二十九首）、矢嶋氏はその内容を次のように分類している。

一、行旅が困難（旅愁）。二首
二、友達と往來（宴會等）出來ない。五首
三、物價が上がる、生活苦、清貧。三首
四、雨景描寫、雨に纏わる典故の面白さ。十一首
五、その他　五首
六、陶淵明を意識して農事に言及する。三首

そして、この一～三に当てはまるのが「苦雨詩」というジャンルである。これは別名「愁霖詩」ともいう。「苦雨詩」は、「喜雨詩」と同様に、後漢末から三国初期の頃に生まれたらしい。ここでは、三国魏の曹丕（字は子桓、一八七～二二六）による「愁霖賦」を挙げる（但し、これは作品の全体ではなく、一部が類書に採られて流伝したものである）。

脂余車而秣馬　余の車に脂して馬に秣ひ、
將言旋乎鄴都　将に言に鄴都に旋らんとす。
玄雲黯其四塞　玄雲　其の四塞に黯く、
雨濛濛而襲予　雨は濛濛として予を襲ふ。
塗漸洳以沉滯　塗は漸洳として以て沉滯し、
潦淫衍而横湍　潦は淫衍して横湍す。
豈在余之憚勞　豈に余の憚労在りて、
哀行旅之艱難　行旅の艱難を哀しまん。
仰皇天而太息　皇天を仰ぎて太息し、
悲白日之不暘　白日の暘れざるを悲しむ。
思若木以照路　若木の以て路を照らすを思ひ、

假龍燭之末光　龍燭の末光を仮りん。
曹丕「愁霖賦」（『藝文類聚』巻二・天部下・雨）

まず、行旅の途にあった曹丕が、鄴都に帰ろうとしたところ、黒雲が立ちこめて雨が降り出したという。それによって道路が泥濘み、更には溜まった水が溢れ出し、そのまま帰路を行くのが困難になってしまう。かかる状況下では、彼は天を仰いで慨嘆し、雨が上がって太陽が道路を明るく照らすことをただ祈念したのである。これも主な「苦雨」の詩賦と同様に、雨という自然への畏怖と、その弊害への悲哀が主題と言えよう。

そして、矢嶋氏の研究では、「苦雨詩」にあたる詩についても、列挙されている。

一に分類される詩。
魏　阮瑀「苦雨」　客行易感悴、我心摧已傷。
梁　何遜「春暮喜晴酬袁戸曹苦雨」　春芳空悅目、游客反傷情。

二に分類される詩。
西晉　張載「霖雨」　何以解愁懷、置酒招親類。
宋　鮑照「苦雨」　川梁日已廣、懷人邈渺漫。
梁　江淹「張黄門協苦雨」　徒酌相思酒、空急促明彈。
梁　劉苞「望夕雨」　高談玩四時、索居慕疇侶。
梁　朱超「對雨」　清樽久不薦、淹留遂待君。
　　無因假輕蓋、徒然想上才。

三に分類される詩。
西晉　傅玄「苦雨」　炊爨不復擧、竈中生蛙蝦。
西晉　傅成「愁霖詩」　蘭桂賤朽腐、柴粟貴明珠。
西晉　張協「苦雨」　尺燼重尋桂、紅粒貴瑤瓊。

このように、「苦雨詩」は、長雨により行旅や交遊が困難になったり、生活に支障が起こったりすることによる憂愁が詠まれたが、更に、長雨のもたらす自然あるいは経済への打撃といった社会問題に言及することもあった。かかる「苦雨詩」の主題の広がりが、様々な雨の詩が生まれる基礎となったのである。

第二章　六朝時代の雨と人生を見つめる詩

前章で述べたように、六朝時代は「喜雨詩」や「苦雨詩」といった雨を詠む詩の典型が確立した時代である。しかし、一方で「喜雨詩」や「苦雨詩」の典型に収まらない雨の詩も幾つか詠まれた。そのうちの一つが陶淵明（字は元亮、または名は潛で字は淵明、三六五～四二七）の「連雨獨飲」である。これは矢嶋氏の論文に言及のない詩である。

運生會歸盡　運生は会ず尽くるに帰す、
終古謂之然　終古　之を然りと謂ふ。
世間有松喬　世間に松喬有らば、
於今定何間　今に於いて定して何れの間にかあらん。
故老贈余酒　故老　余に酒を贈り、
乃言飲得仙　乃ち言ふ「飲まば仙を得ん」と。
試酌百情遠　試みに酌めば百情遠く、
重觴忽忘天　觴を重ぬれば忽ち天を忘る。
天豈去此哉　天　豈に此を去らんや、
任眞無所先　真に任せて先んずる所無し。
雲鶴有奇翼　雲鶴　奇翼有り、

八表須臾還　八表をも須臾にして還る。
自我抱茲獨　我れ茲の独を抱きてより、
僶俛四十年　僶俛すること四十年。
形骸久已化　形骸は久しく已に化するも、
心在復何言　心在り 復た何をか言はん。

陶淵明「連雨獨飲」（『陶淵明集』巻二）[4]

まず、「運生は会ず尽くるに帰す」とあるように、人生は必ず死によって終わるものであり、不老長生の仙人になれるものではないという。この詩は、陶淵明の母の孟氏の服喪が明けようとする元興三年（四〇四）に詠まれたという説が有力である。[5]当時四十歳の陶淵明は、改めて自らの死を意識しながら、除服した後にどのように生きるべきかを悩んでいた。しかし、長老から仙人になれるという酒をもらったことにより、彼は一人で酒を飲むことにしたという。そして、飲酒しているうちにあたかも仙人のような心の解放を得て、これまで四十年も齷齪と過ごしていたが、元来自分はこの独自の「心」を持っていたと実感し、「形骸は久しく已に化するも、心在り復た何をか言はん」と結んだ。即ち、これから老いて死にゆく身であっても、この解放された自由な心を得ていれば、そのまま生きてゆけるとし、再び仕官する道を選んだのである（但し、翌義熙元年（四〇五）十一月にはやはり身心の解放を望み、隠棲する）。[6]

この「連雨獨飲」において驚くべきは、詩中に雨の情景や雨への憂いを詠む箇所が無いことであるが、詩題から「連雨」、即ち連日続く雨に起因して詠まれた作であると判る。前章で「苦雨詩」で詠まれる憂愁の内容として、友達と往来できないことや行旅が困難であることを挙げたが、陶淵明も「連雨」によって友人たちとの交流、殊に酒宴が難しくなり、「独り飲」んでいた。しかし、その「連雨」によって感じた孤独と苦悩が、却って自分の境遇や生き方を省みることに繋がったのである。

また、同様の内容を備えた詩として、六朝斉の謝朓（字は玄暉、四六四～四九九）の「觀朝雨（朝雨を観る）」がある。

朔風吹飛雨　朔風は飛雨を吹き、
蕭條江上來　蕭条として江上より来たり。
既灑觀百常　既に百常の観に灑ぎ、
復集九成臺　復た九成の台に集まれり。
空濛如薄霧　空濛として薄霧の如く、
散漫似輕埃　散漫として軽埃に似たり。
平明振衣坐　平明に衣を振ひて坐するに、
重門猶未開　重門は猶ほ未だ開かず。
耳目暫無擾　耳目は暫く擾さるる無く、
懷古信悠哉　古を懐ふこと 信に悠なるかな。
戢翼希驤首　翼を戢めては首を驤げんことを希ひ、
乘流畏曝鰓　流に乗じては鰓を曝さんことを畏る。
動息無兼遂　動息は兼ね遂ぐる無く、
岐路多徘徊　岐路に徘徊すること多し。
方同戰勝者　方に戦勝の者に同じくし、
去翦北山萊　去りて北山の萊を翦らん。

謝朓「觀朝雨」（『文選』巻三十）

全十六句のうち、前半八句は主に「朝雨」の描写である。謝朓は早朝に宮へと赴いたが、雨のためか門が開かない。一人で細やかに繁く降る雨を見つめながら、座して開門を待ったが、なお閉じられたままであった。そこで、九句目より彼は自らの将来の生き方について考え始める。彼は「古を懐」い、その栄枯盛衰に思いを巡らせ、「動息（出仕と隠棲）」を両方叶えられる者はおらず、どちらを選ぶ

べきかの「岐路」に迷う者は多いという。こうした迷いに打ち勝って自由を得た先人に倣い、「去りて北山の萊を翦らん」、即ち、潔く隠棲せんことを思うのであった。この謝朓「觀朝雨」詩も、思いもよらない「雨」、それにより他者が不在となったことを、自らの人生を再考する機会としている。

更に、この詩の九句目の「耳目は暫く擾さるる無く」は、耳も目も暫くは煩わされることもないという意味であるが、六朝時代の詩人は「雨」を聴くことにあまり言及しない。「耳目」という単語で視覚・聴覚どちらも意識の中にあることは確かであるが、「空濛として薄霧の如く、散漫として輕埃に似たり」とあるように、視覚による雨の描写が中心である。このことから、雨を聴覚で捉えようとする意識が視覚的な意識よりも薄いことが判る。

また、雨から発した憂愁を「苦雨詩」として詠むのみならず、それを気の置けない他者に寄せるということも行われた。六朝宋の謝瞻（字は宣遠、三八五～四二一）が親族の謝靈運（字は未詳、三八五～四三三）に応酬した詩から、それが推察される。

夕霽風氣涼　　夕に霽れて風気は涼しく、
閑房有餘清　　閑房に余清有り。
開軒滅華燭　　軒を開きて華燭を滅せば、
月露皓已盈　　月露 皓として已に盈つ。
獨夜無物役　　独夜 物の役する無く、
寢者亦云寧　　寝ぬれば亦た云に寧し。
忽獲愁霖唱　　忽ち獲たり 愁霖の唱の、
懷勞奏所成　　労を懐きて成す所を奏するを。
歎彼行旅艱　　彼の行旅の艱を歎き、
深茲眷言情　　茲の眷言の情を深くす。
伊余雖寡慰　　伊れ余は慰み寡なしと雖も、
殷憂暫爲輕　　殷憂 暫く為に軽し。
牽率詶嘉藻　　牽率せられて嘉藻に詶い、
長揖愧吾生　　長揖して吾生に愧づ。

謝瞻「答靈運」（『文選』巻二十五）

長雨がやっと晴れた一人きりの夜、清涼な風を感じて部屋で寛いでいた謝瞻は、謝靈運から「愁霖の唱」、即ち「苦雨詩」を受け取ったという。そこには「彼の行旅の艱を歎き、茲の眷言の情を深くす」とあるように、長雨によって謝靈運が旅の途上に長雨で難儀したことを嘆きながら、また、同じく長雨に苦しんだであろう謝瞻を慰め励ます言葉が詠み込まれており、それによって心が一層軽くなったと述べ、謝靈運の厚情と詩才を称えている。

このように、「苦雨詩」の多くは「長雨」による閉塞感や孤独感から生じた自らの憂愁を詠むものであるが、そこから陶淵明や謝朓等によって人生や処世に思いを馳せる作が現れた。また、自分の憂愁のみならず、他者のそれにも思いを致して慰めるということも行われたのである。

第三章　唐代における「喜雨詩」の変化とその影響

前述したように、唐代以前における雨を主題とする詩は、基本的に「喜雨詩」と「苦雨詩」の二つであった。そして、六朝時代までの「喜雨詩」は定型を保っていたが、唐代に入るとその定型から外れて、新しい「喜雨詩」が詠まれるようになった。これは前章で挙げた「苦雨詩」の影響が「喜雨詩」にも及んだと言えるかも知れない。矢嶋氏は、前掲の論文にて唐代において「喜雨詩」が次の三種類に分岐したと述べている。

一、傳統的な「喜雨」詩を繼承するもの。（旱魃の時に、宮廷詩人的な立場の詩人が降雨を喜び豐作を言祝ぐ）
二、旱魃とは限らず雨を喜び農事にもよい雨だと詠じるもの。
三、農事に關係なく單に雨を喜ぶもの。

本章において注目するのは、定型を外れた「三、農事に關係なく單に雨を喜ぶもの」であり、矢嶋氏はこれに該当する作として、次の詩を挙げている。

初唐　李嶠「奉和春日遊苑喜雨應制」（五律）
盛唐　玄宗「同劉晃喜雨」（五律）
盛唐　張説「奉和聖製同劉晃喜雨應制」（五律）
盛唐　魏知古「奉和春日途中喜雨應詔」（五言十句）
盛唐　杜甫「喜雨」（五律）「春夜喜雨」（五律）
中唐　錢起「蘇端林亭對酒喜雨」（五律）

このうち、李嶠・張説・魏知古の作は、天子に「奉」るものであり、確かに農事への言及はないものの、主に天からの恵みの雨が天子の宮殿に降ったことを喜び祝うもので、それを得た天子の徳を称える内容となっている。

但し、玄宗（李隆基、六八五～七六二）の詩はそうした要素はなく、所謂「詠物詩」の様相を呈しており、矢嶋氏も唐代の多様化した「喜雨詩」を象徴する作品として評価している。

節變寒初盡　節変じて寒初めて尽き、
時和氣已春　時和して気已に春なり。
繁雲先合寸　繁雲　先づ寸を合し、
膏雨自依旬　膏雨　自ら旬に依る。
颯颯飛平野　颯颯として平野に飛び、
霏霏靜暗塵　霏霏として暗塵を静かにす。
懸知花葉意　懸(はる)かに知る　花葉の意、
朝夕望中新　朝夕　望中新たなり。

玄宗「同劉晃喜雨」（『全唐詩』巻三）[7]

即ち、この玄宗詩は春の時節に合わせたかのように降る「雨」の様態を緻密に描写する内容となっており、「喜雨」詩が詠まれる上での定型である、天恩を称えたり、豊作を言祝いだりする表現が見えない。それは玄宗という天子が詠んだことに起因するのであろう。また、中唐初期に活躍した「大暦の十才子」の一人である錢起（字は仲文、？～七八二）の「蘇端林亭對酒喜雨」詩も、「雨」を緻密に描写するが、更に、彼は酒を飲み、そのまま興に乗じて歌を唱ってその雨を肴にして楽しんだという。つまり、「詠物詩」、もしくは「自然詩」のような内容となっている。[8]

そして、本章で注目したい新たな「喜雨詩」が、盛唐の杜甫（字は子美、七一二～七七〇）による「春夜喜雨」である。

好雨知時節　好雨　時節を知り、
當春乃發生　春に当りて乃ち発生す。
隨風潛入夜　風に随ひて潜(ひそ)かに夜に入り、
潤物細無聲　物を潤して細かにして声無し。
野徑雲俱黑　野径　雲は俱に黒く、
江船火獨明　江船　火は独り明らかなり。
曉看紅濕處　暁に紅の湿れる処を看れば、
花重錦官城　花は錦官城に重からん。

杜甫「春夜喜雨」（『杜詩詳注』巻十）[9]

まず、春の「好雨」が如何なるものであるのかを述べている。「時節」は「四時（春夏秋冬）」と「二十四節気」のことであり、温暖となる「仲春（啓蟄・春分）」の頃、自然界の万物が芽吹き、それを助けるように恵みの雨が降る。その雨は「潜やか」に風に乗ってやって来て万物を潤しながら、闇夜に無音で降ってきた。そして、五句目より、一人で眠らずにその無音の雨を見つめ聴いていた杜甫は、この「雨」の行く先を想像する。雨が降り注ぐ先には、「黒」い雲の垂れ込める小道があり、更には錦江に浮かぶ漁り火が「明」るく輝いているのであろう。そこから、段々と夜が明け、色鮮やかに「紅」く湿った何かが目に入る。それは錦官城には多くの花が濡れながら重さを含んで咲いている姿であろうと結んでいる。

夜雨の視覚的移り変わりの効果が秀逸な詩であるが、農事や天恩については詠まれていない。仲春に恵みの雨が降り、それにより万物が芽吹くと詠んでいるが、肝心の秋の収穫までの言及がないのである。吉川幸次郎氏の『杜甫ノート』[10]では、この詩の後半について、次のように解説されている。

下の句「江船に火は獨り明かなり」。句意は詳説するまでもない。上の句の闇黒の中に醞釀されるもの、それはもとより醞釀の成果を將來に期待するものである。…（中略）…とはいえ、この明日の光明への期待は、この聯においては、なお意識の下に潜むものであったが、やがてそれは詩人の意識の上にも、油然と卷きあがる。それが、結びの聯である。…（中略）…しかし、この詩の妙處は、「花は錦官城に重からん」という事態が、直ちには指摘されずして、「曉に紅濕れる處を看れば」によって導かれていることにある。知覺が、まずとらえるのは、色であり、それが何物であるかを判斷するのは、後である。詩人はそうした過程を、恰もその過程のままに再現する。この肉迫的な寫實によって、一字一字の重さは、誠に磐石のごとくであり、磐石の言葉によって表現された富麗な素材は一層富麗に、錦官城の花は一層明日への期待を果す。しかもそれはきらきらと照りかがやく花ではなく、しっとりと雨にぬれた重厚な花である。

つまり、暗い乱世においても、「春の雨」は万物に降り注ぎ、花を潤し、夜明けには紅く美しく咲き誇る。それを「喜ぶ」詩であることから、杜甫は「春の雨」に濡れて咲く紅い「花」に自らの「明日の光明への期待」を見出したことが判る。このように、唐代から「喜雨詩」においても定型から脱し、更に、自らの明るい未来を恵みの雨に託して詠むという作が出現したのである。

第四章　唐代における「聴雨」の詩の系譜

（一）過去と現在の「雨」の共有

後漢末に生まれ、六朝時代には定型化していた「喜雨詩」と「期苦雨詩」は、以後、六朝時代から唐代にかけて、そのジャンルに当てはまらない内容が読まれるようになった。陶淵明や謝朓、杜甫などが一人雨の中で思いを巡らせたその内容は、自らの過去に対する葛藤であり、これからの展望や処世観であったとも言える。

更に、そうした思いを強くさせるために、より閉塞感と視覚的制限がある「夜」という時間帯に「雨」を「聴く」詩が詠まれるようになった。前述したが、六朝時代の詩人は「雨」を聴くことに言及することが少なく、「雨」を聴覚的に詠むことが多くなったのは唐代からである。そうした「雨」を聴く詩について、加納留美子氏の「夜雨對牀―蘇軾兄弟を繋いだもの―」[11]では、以下のように論じられている。

唐代「聞雨」詩中、雨夜の例を分析すると、主に二つの類例に概括できる。①雨音を聞きながら孤獨な現狀を自覺し、離れた故人、家人、故郷等を想って懷かしむもの。②雨音を聞く中、榮達や報国を望みながら叶わず老境に到った自身の不遇を嘆き、孤憤を抱えるもの。…（中略）…「夜雨對牀」と「聞雨」は、夜、雨音に耳を澄ますという點で共通する。…（中略）…但し、兩者の間には明確な違いがある。最大の相違は、「聞雨」詩が、雨夜＝獨りで過ごす憂愁の場とするのに對し、「夜雨對牀」では、雨夜＝二人（複數）で共有される、喜ばしき場とする點である。…（中略）…もう一つの相違點は、夜雨を經驗する時點の違いである。前掲したように、唐代の「夜雨對牀」詩は過去の經驗として描かれることがあり、詩人はその喪失を悲嘆した。それに對し、「聞雨」詩には「過去に雨音を聞いて抱いた感情を思い出す」という用例がない。夜雨は必ず現在の情景として描かれ、詩人はその情景に觸發されて何らかの感情を抱くのである。

主な「雨」を聽く詩がそうした現狀への悲哀や故郷や友人への思い、自らの境遇への憤慨を詠むことが多かったことも確かであろう。但し、前述した陶淵明や謝朓、杜甫の詩をそれぞれ見ていくと、この二つの類型だけではなく、これからの処世の在り方を思い、また、未来に展望を持って、雨を見つめ、かつ、聽いていることがあると判る。『全唐詩』によると、唐代の「聞雨」を詩題とする詩は六首、「聽雨」を詩題とする詩は三首ある。また、詩句としては、「聞雨」は十二首、「聽雨」は十六首に見られる（実景としての描写であり、比喩は除く）。

・「聞雨」の詩

盛唐　張説「**聞雨**」　多雨絶塵事、寥寥入太玄。
「**聞雨**」　危戍臨江火、空齋入雨寒。
盛唐　張繼「寄鄭員外」　經月愁**聞雨**、新年苦憶君。
盛唐　戎昱「秋館雨後、得弟兄書、即事呈李明府」　空館復**聞雨**、貧家怯到秋。
中唐　李約「病中宿宜陽館**聞雨**」　風吹桐竹更無雨、白髮病人心到家。
中唐　武元衡「夜坐**聞雨**寄嚴十少府」　風翻涼葉亂、雨滴洞房深。
中唐　孟郊「酬李侍御書記秋夕雨中病假見寄」　秋風遶衰柳、遠客**聞雨**聲。
中唐　元稹「生春二十首　丁酉歳、凡二十章」其十五　見燈如見霧、**聞雨**似聞風。
中唐　白居易「汎小牖二首」其一　牖頭漾漾知風起、牖背蕭蕭**聞雨**滴。
晚唐　許渾「歸長安」　大抵莫教**聞雨**後、此時腸斷不應難。
晚唐　李商隱「中元作」　曾省驚眠**聞雨**過、不知迷路爲花開。
晚唐　溫庭筠「舞衣曲」　張家公子夜**聞雨**、夜向蘭堂思楚舞。
晚唐　溫庭筠「送陳嘏之侯官兼簡李常侍」　春服照塵連草色、夜船**聞雨**滴蘆花。
晚唐　李咸用「同友生春夜**聞雨**」　春雨三更洗物華、亂和絲竹響豪家。
晚唐　韓偓「**聞雨**」　香侵蔽膝夜寒輕、**聞雨**傷春夢不成。
晚唐　黄滔「旅懷」　羈遊數地值兵亂、宿在孤城**聞雨**秋。
晚唐　黄滔「客舍秋晚夜懷故山」　孤枕憶山千里外、破窗**聞雨**五更初。

・「聴雨」の詩

中唐　韋應物「送顔司議使蜀訪圖書」
　山館夜聴雨、秋猿獨叫羣。
中唐　戴叔倫「寄禪師寺華上人次韻三首」其三
　近聞離講席、聴雨半山眠。
中唐　戴叔倫「舟中見雨」　今夜初聴雨、江南杜若青。
中唐　戴叔倫「暮春感懷」　短策看雲松寺晚、疏簾聴雨草堂春。
中唐　王建「聴雨」（一作司空圖詩）
　半夜思家睡裏愁、雨聲落落屋簷頭。
中唐　白居易「雨中招張司業宿」
　能來同宿否、聴雨對床眠。
中唐　朱慶餘「送顧非熊下第歸」
　聴雨宿吳寺、過江逢越人。
晚唐　李商隱「宿駱氏亭寄懷崔雍崔袞」
　秋陰不散霜飛晚、留得枯荷聴雨聲。
晚唐　李商隱「七月二十八日夜與王鄭二秀才聴雨後夢作」
　逡巡又過瀟湘雨、雨打湘靈五十弦。
晚唐　劉得仁「送鄂州崔大夫赴鎮」
　千峰與萬木、清聴雨情新。
晚唐　李群玉「春寒」
　悶斟壺酒暖、愁聴雨聲眠。
晚唐　賈島「投龐少尹」
　病起望山臺上立、覺來聴雨燭前吟。
晚唐　溫庭筠「句」
　春水碧于天、畫船聴雨眠。
晚唐　盧士衡「僧房聴雨」
　古寺松軒雨聲別、寒窗聴久詩魔發。
晚唐　左偃「寄鑒上人」
　長記二林同宿夜、竹齋聴雨共忘眠。
晚唐　李中「贈朐山楊宰」　聴雨入秋竹、留僧覆舊棋。
晚唐　無可「秋寄從兄賈島」聴雨寒更徹、開門落葉深。
晚唐　尚能「中秋旅懷」　望鄕連北斗、聴雨帶西風。
晚唐　韋莊「菩薩蠻」　春水碧於天、畫船聴雨眠。

そして、唐代においては雨を詠むうちに、「複数（二人以上）」で「雨」を聴く詩も詠まれるようになる。その先駆的なものとして、中唐の錢起の「夜雨寄寇校書」を挙げたい。

秋館煙雨合　秋館　煙雨合し、
重城鐘漏深　重城　鐘漏深し。
佳期阻清夜　佳期　清夜を阻み、
孤興發離心　孤興　離心を発す。
燭影出綃幕　燭影　綃幕を出で、
蟲聲連素琴　虫声　素琴に連ぬ。
此時蓬閣友　此の時　蓬閣の友、
應念昔同衾　応に昔同衾せしを念ふべし。

錢起「夜雨寄寇校書」（『錢考功集』巻五）

まず、けぶるような雨が秋の旅館に降り注ぐ中、重なり合う城門に鐘漏の音が深く染み入り、夜が更けていく様子が描かれる。普段なら秋の晴れた清涼なる夜となるが、それを邪魔するように雨が降ることにより強い孤独感が起こり、また、友人と離ればなれの哀しみも思い出させたと詠んでいる。そこで、気分転換をしようとしたのか、火影の映る薄絹のたれ布から外を見てみた。すると、虫の声と琴の音色の連奏が雨音の向こうから聞こえてきた。そこから、かつての同僚であり友人である寇校書との思い出が蘇ったという。七句目の「蓬閣」とは秘書省のことであり、錢起は天宝九載（七五〇）に科挙に及第した後、秘書省の校書郎となった。この詩を詠んだときは、その職から別部署に移っていたのであろうが、彼らが同僚であった頃は、宿直などで寝床を並べて、雨音を聴きつつ、話をしながら眠ったらしい。そして、そのような往事を回顧し、きっと寇校

書も今同じように思い出しているであろうと詠み、詩を結んでいる。

この詩は、詩中に「雨」の聴覚的な表現がないためか、前掲の「聞雨」や「聴雨」の詩には挙げられていない。しかし、前章の唐代の「喜雨詩」でも錢起について少しく言及したが、これまでの伝統を継承しながら新たな「雨」の詩を詠んだ詩人である。この錢起の「夜雨寄寇校書」詩は、加納氏の述べる唐代の「聞雨」詩の「①雨音を聴きながら孤獨な現狀を自覺し、離れた故人、家人、故郷等を想って懐かしむ」という特徴を備えている。ここで注目すべきは、雨を聴き、物思いが生じたときの状況の変化である。つまり、六朝時代の「雨」を見つめる詩においては、「雨」によって一人で自己の境遇や処世を思っていたが、錢起の詩では友人と宿直しながら夜雨を聴いた思い出が想起されており、友情に重きが置かれている。「雨」を聴くという行為が、個人の営みから複数人で行う営みへと変容していったのである。

（二）現在と未来の「雨」の共有

この「雨」を他者と共有する詩は、錢起よりやや時代が後の白居易（字は樂天、七七二～八四六）も詠んでいる。

過夏衣香潤　夏を過ぎて衣香潤ひ、
迎秋簟色鮮　秋を迎へて簟色鮮やかなり。
斜支花石枕　斜に花石の枕を支へ、
臥詠藥珠篇　臥して藥珠の篇を詠ず。
泥濘非遊日　泥濘は遊ぶ日に非ず、
陰沈好睡天　陰沈は睡るに好き天。
能來同宿否　能く来たりて同宿せんや否や、
聽雨對牀眠　雨を聴き対牀して眠らん。

白居易「雨中招張司業宿」（『白氏文集』巻五十六）[12]

まず、季節が秋になって過ごしやすくなった頃、花石の枕に斜めにもたれかかり、遊仙詩を吟詠して仙人の気分になっていたという、白居易の現状が詠まれる。そして、降雨により泥が跳ねるような天気の日は、出遊するにふさわしくないとしたが、そんな天気も静かに眠るには好都合だと転換し、「能く来たりて同宿せんや否や、雨を聴き対牀して眠らん」、即ち、我が家にやって来て、向かい合った寝台で微睡みながら雨音を聴こうと、友人の張籍（字は文昌、七六八～八三〇頃）に誘いかけた。

この白居易詩と錢起詩について、共通点は「雨」を気の置けない他者と共有するものとしている点であり、相違点はその共有する時間軸である。白居易は、錢起のように過去の共有を懐かしんでいるのでなく、現在、「雨」が降っていて、これから一緒にこの「雨」を楽しむために張籍に同宿を求めているのである。

この「雨」を共有する時間軸の変化は、時代が進むにつれてより顕著に見られるようになる。それに該当する作が、晩唐の李商隱（字は義山、八一二～八五八）の「夜雨寄北」詩であり、李商隱が蜀に滞在している頃に、長安で彼の帰りを待ちわびる妻に向けて詠んだ詩と言われている。

君問歸期未有期　君　帰期を問ふも未だ期有らず、
巴山夜雨漲秋池　巴山の夜雨　秋池に漲る。
何當共剪西牕燭　何か当に共に西窓の燭を剪りて、
却話巴山夜雨時　却て巴山夜雨の時を話るべき。

李商隱「夜雨寄北」（『李義山詩集』巻六）[13]

即ち、いつ帰れるのかを妻から尋ねられた李商隱は、今の自分は

秋の池をみなぎらせる「巴山の夜雨」に対していると詠む。そして、いずれ未来において妻と再会し、夜の西の窓辺で蝋燭の芯を切りながら、この「巴山の夜雨」を聴いていたときの思いを語りたいと返した。この二句目と四句目で「巴山の夜雨」を繰り返していること、また、その時間軸について、川合康三氏は次のように解釈している。[14]

前の「巴山夜雨」は今現在の気持ちに似つかわしく冷たく寂しい光景であり、後の「巴山夜雨」は枕物語として語ることができる過去となったそれである。…（中略）…短い詩ではあるが、そのなかで現在と未来が錯綜する。現在から未来を想定して、その未来の時点からすでに過去となっている現在を振り返る、そのことを今現在の時点から想う。

つまり、唐代における変化としては、「雨」による閉塞感や孤独感から自らを内省して処世を考えるのみならず、そうした自らの思いを共有し得る他者を思う詩、更には未来において他者と自らの思いを共有しようする詩が詠まれるようになったことが挙げられる。「雨」を聴くことを信頼できる他者と共有するようになり、また、「雨」を聴く時間軸を現在や過去だけでなく、未来にも置くようになったのである。北宋の蘇軾・蘇轍兄弟の「夜雨對牀」詩は、かかる系譜の先に生まれたと言えよう。

第五章　蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」

（一）蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」の交遊

因みに、蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」に関する詩は、彼らの生涯を通じて繰り返し詠まれ、応酬されたが、総数で言えば、蘇軾は七首、蘇轍は五首の作を詠んだ。[15]

・蘇軾の「夜雨對牀」詩

①嘉祐六年（一〇六一）「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」（『蘇軾詩集』巻三）

②熙寧十年（一〇七七）「子由將赴南都、與余會宿於逍遙堂、作兩絶句、讀之殆不可爲懷、因和其詩以自解。余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣、而余亦竊聞其一二。以爲今者宦游相別之日淺、而異時退休相從之日長、既以自解、且以慰子由云」其一（『蘇軾詩集』巻十五）

③熙寧十年（一〇七七）「初別子由」（『蘇軾詩集』巻十五）

④元豊二年（一〇七九）「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由、故作二詩授獄卒梁成、以遺子由二首」其一（『蘇軾詩集』巻十九）

⑤元豊六年（一〇八三）「初秋寄子由」（『蘇軾詩集』巻二十二）

⑥元祐六年（一〇九一）「感舊詩并敍」（『蘇軾詩集』巻三十三）

⑦元祐八年（一〇九三）「東府雨中別子由」（『蘇軾詩集』巻三十七）

・蘇轍の「夜雨對牀」詩

①熙寧十年（一〇七七）「逍遙堂會宿二首并敍」其一（『欒城集』巻七）

②元豊三年（一〇八〇）「舟次磁湖、以風浪留二日、不得進子瞻。以詩見寄、作二篇答之。前篇自賦、後篇次韻」其一（『欒城集』巻十）

③元祐元年（一〇八六）「後省初成直宿呈子瞻二首」其二（『欒城集』巻十四）

④元祐三年（一〇八八）「五月一日同子瞻轉對」（『欒城集』巻十五）

⑤元祐四年（一〇八九）「奉使契丹二十八首　神水館寄子瞻兄四絶」
其二（『欒城集』巻十六）

つまり、現存する兄弟最初の「夜雨對牀」詩は、蘇軾の「夜雨對牀」詩の①である。詩題に「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之（辛丑十一月十九日、既に子由と鄭州西門の外に別れ、馬上に詩一篇を賦して之に寄す）」とあるように、嘉祐六年（一〇六一）十一月、蘇軾が二十六歳、蘇轍が二十三歳のとき、蘇軾は鳳翔府簽判に任じられて任地に赴くことになり、蘇轍は開封の西の城門である新鄭門まで蘇軾を見送った。そこで蘇軾から蘇轍に寄せられた詩である。因みに、蘇轍は開封に戻り、父である蘇洵（字は明允、号は老泉、一〇〇九～一〇六六）の面倒を見ることになっていた。彼ら兄弟は幼い頃から父の薫陶を受けて勉学に励み、若くして同時に科挙に及第したが、この嘉祐六年（一〇六一）の別れが、彼らの人生における最初の別れであった。

不飲胡爲醉兀兀　飲まざるに胡為ぞ酔ひて兀兀たる、
此心已逐歸鞍發　此の心　已に帰鞍を逐ひて発す。
歸人猶自念庭闈　帰人すら猶ほ自ら庭闈を念ふ、
今我何以慰寂寞　今　我　何を以てか寂寞を慰めん。
登高回首坡壟隔　高きに登りて首を回らせば　坡壟隔たり、
但見烏帽出復沒　但だ烏帽の出でて復た没するを見る。
苦寒念爾衣裘薄　苦寒　爾の衣裘の薄く、
獨騎瘦馬踏殘月　独り瘦馬に騎りて残月を踏むを念ふ。
路人行歌居人樂　路人は行歌し　居人は楽しむ、
童僕怪我苦悽惻　童僕は我の苦だ悽惻なるを怪しむ。
亦知人生要有別　亦た知る　人生の要ず別れ有るを、
但恐歲月去飄忽　但だ恐る　歳月の去ること飄忽たるを。
寒燈相對記疇昔　寒燈　相ひ対して疇昔を記し、
夜雨何時聽蕭瑟　夜雨　何れの時にか蕭瑟たるを聴かん。
君知此意不可忘　君　此の意の忘るるべからざるを知らば、
愼勿苦愛高官職　愼しみて苦だ高き官職を愛する勿かれ。

［自注］嘗有「夜雨對牀」之言、故云爾。
嘗て「夜雨対牀」の言有り、故に爾か云ふ。
蘇軾「辛丑十一月十九日、既與子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩一篇寄之」（『蘇軾詩集』巻三）

一句目から四句目までは、都に戻って行く蘇轍を見つめながら、哀しみを深める様子が、五句目から八句目までは、その蘇轍が孤独に痩せ馬に騎乗して寂しく帰る様子が詠まれている。九句目から十二句目までは再び蘇軾自身のことであるが、周囲と対比させながら、哀しみの原因を見つめる。蘇軾は、「人生の要ず別れ有る」ことは勿論分かっているのであるが、「歳月の去ること飄忽たる」ことを恐れずにはいられないからであるという。しかし、そこから蘇軾はある昔の約束とそれに纏わる詩を思い出すことで、その別れの哀しみから脱却する。そして、蘇轍に対して、将来には高き地位に執着することなく引退し、蘇轍と隠棲したいと呼びかけた。その約束が、「夜雨　何れの時にか蕭瑟たるを聴かん」というものであった。

そして、「はじめに」で挙げた蘇轍の「逍遙堂會宿二首」の序文やこの蘇軾詩の自注にあるように、その纏わる詩というのが、次に挙げる中唐の韋應物の詩である。

余辭郡符去　余は郡符を辞して去り、
爾爲外事牽　爾は外事の為に牽かる。
寧知風雪夜　寧んぞ知らん　風雪の夜、
復此對牀眠　復た此に対牀して眠るを。

始話南池飲　始めに話る 南池の飲、
更詠西樓篇　更に詠む 西楼の篇。
無將一會易　一会を将て易きとする無かれ、
歲月坐推遷　歲月 坐ろに推遷す。

韋應物「示全眞・元常」（『韋應物集校注』巻三）[16]

この詩は、韋應物が滁州刺史を辞めたとき、外甥である沈全眞と趙元常と再会して同宿した。そのときの感慨を詠んだ作である。職を辞した韋應物と異なり、若い外甥たちは世俗の雑事に追われている。しかし、この度同宿して語り合う時間を持つことが叶い、そこで雪の夜に寝床を並べたり、宴会や詩作を楽しんだりしたという。その上で、韋應物は、この再会は得難いものであり、歲月は何とはなしに推し流れていくものなのだから、再びこうした楽しみを尽くせるとは限らない、と結んだ。実は、この韋應物詩は「風雪の夜」とあるように、元々は「雨」ではなかった。また、韋應物詩は、歲月の移ろいと現実的な事情から、若い外甥たちに一期一会の重みを示そうとしたのと同時に、再会が期しがたい状況を憂えていることが窺える。しかし、蘇軾・蘇轍はおそらく敢えて「安んぞ知らん風雨の夜、復た此に対床して眠らん」と、「雪」を「雨」に変換した。これは、この韋應物詩を「雨」を聴く詩の系譜の中の一首と見なしたのであり、その上で、彼らは「夜雨對牀」を将来の希望に満ちた約束のキーワードとしたのである。

蘇轍の最初の「夜雨對牀」詩は、熙寧十年（一〇七七）秋八月、蘇轍三十九歲のときに詠まれた「逍遙堂會宿二首」である。この半年前の熙寧十年（一〇七七）二月、蘇軾は知徐州、蘇轍は南京留守簽判に任ぜられた。そのため、蘇轍は蘇軾と開封で落ち合い、七年ぶりの再会を喜んだ。そのまま兄弟ともに徐州に赴き、四月に徐州に到着、蘇轍は百余日徐州の逍遙堂に滞在し、八月十六日、任地の南京応天府に出立した。この出発間近の頃の作である。

逍遙堂後千尋木　逍遙堂後 千尋の木、
長送中宵風雨聲　長く中宵 風雨の声を送る。
誤喜對床尋舊約　誤りて対床を喜び 旧約を尋ぬるも、
不知漂泊在彭城　漂泊して彭城の在るやを知らず。

秋來東閣涼如水　秋東に来たれば閣の涼しきは水の如く、
客去山公醉似泥　客山を去りて公の醉ふこと泥に似たり。
困臥北窗呼不起　北窓に困臥して呼ぶも起きず、
風吹松竹雨淒淒　風は松竹に吹きて雨は淒淒たり。

蘇轍「逍遙堂會宿二首并敍」（『欒城集』巻七）[17]

この其一が「夜雨對牀」の関連詩に当たる。まず、その場所と時間が示され、逍遙堂の木々に「風雨」が鳴るその音をともに聴いている、即ち「夜雨對牀」している様子が詠まれる。しかし、「誤喜」とあるように、これはつかの間のことで真に喜ぶ状況ではなく、間もなく別れの時がやって来るため、序文に述べた「早に退きて、閑居の楽を為す」という、昔からの約束を果たすのは一体何時になるのか、現在居る彭城（徐州）の位置さえも判らなくなるのではないかと結び、哀しみを深めている。

また、続けて其二についても述べておきたい。其二は、蘇轍が去った後の蘇軾の未来を想像した内容である。即ち、秋が深まって寒くなる頃、「客」たる蘇轍が南京応天府へ行くために再び別れ別れになった。そのため、徐州に残された「公」、即ち蘇軾が一人で酔い伏して「風は松竹に吹きて雨は淒淒」たる音を聴きながら、「困臥（憂苦して眠る）」ことになるだろうと述べている。再会した喜びが大きい分、これからの離別を慨嘆することになり、だからこそ、蘇轍

が「夜雨對牀」の約束をかみしめていることが窺える。

これらの蘇軾・蘇轍の詩はいずれも人生の下降線をたどっている頃ではないため、彼らは「夜雨對牀」を遠い未来のことながら実現可能な願いと見なしている。しかし、彼らの人生が流転することにより、「夜雨對牀」詩も変化していくことになった。

（二）蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」の発展

治平四年（一〇六七）正月の神宗の即位により、神宗と王安石（字は介甫、一〇二一～一〇八六）によって新法による国政改革が強行されたが、蘇軾・蘇轍は師の歐陽脩（字は永叔、一〇〇七～一〇七二）らとともに新法に反対する旧法党に属した。そのため、それ以後の彼らは度々左遷される憂き目に遭っている。そのうち、蘇軾の大きな挫折は二度ある。一度目が元豊二年（一〇七九）に起こった所謂「烏台詩案」、また、それによって翌年から黄州安置に処されたことであり、二度目が晩年の紹聖元年（一〇九四）から嶺南の恵州に、次いで紹聖四年（一〇九七）には海南島に流謫されたことである。後述するが、蘇轍も同時期に左遷されている。そして、かかる時期に詠まれた「夜雨對牀」詩は前節に挙げた蘇軾の「夜雨對牀」詩の④と⑦であるが、これらはそれ以外の「夜雨對牀」の実現性を信じていた頃の作とは「雨」を聴く様相、「夜雨對牀」に対する思いが異なっているのである。

まず、元豊二年（一〇七九）、知湖州であった蘇軾が、朝廷誹謗の罪により、七月二十八日捕縛され、八月十八日に御史台に投獄された。この筆禍事件が「烏台詩案」であり、その拘束は十二月まで続いた。その間、蘇轍は南京留守簽判として南京応天府におり、蘇軾の家族を保護していた。当時、蘇軾は四十四歳、蘇轍は四十一歳である。死を覚悟した蘇軾は、獄中から蘇轍に次のような詩を寄せた。[18]

聖主如天萬物春　聖主 天の如く万物春なるに、
小臣愚暗自亡身　小臣 愚暗にして自ら身を亡(ほろぼ)す。
百年未滿先償債　百年 未だ満たずして先づ債を償ひ、
十口無歸更累人　十口 帰する無くして更に人を累(わずらは)す。
是處青山可埋骨　是(いた)る処の青山 骨を埋むべし、
他年夜雨獨傷神　他年の夜雨 独り神を傷(いた)ましむ。
與君世世爲兄弟　君と世世兄弟と為り、
又結來生未了因　又た来生未了の因を結ばん。

蘇軾「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵。自度不能堪、死獄中、不得一別子由。故作二詩、授獄卒梁成、以遺子由二首」其一（『蘇軾詩集』巻十九）

即ち、「天」の如き聖君によって「万物」が「春」の頃のように恵みを受けていると、「喜雨詩」のような描写がなされた後、自らの行状によって身を滅ぼした現状を述べた。それ故に、自分は寿命より早く獄死するために、先立たれた家族を蘇轍に委ねざるを得ず、迷惑をかけることになるだろうと詫びた。そして、「是る処の青山骨を埋むべし、他年の夜雨 独り神を傷ましむ」とあるように、それでも自業自得の自分はどこで骨を埋めることになっても良いとするが、残された蘇轍がたった一人で「夜雨」の音を聴いて心を傷めるのではないかと心配した。これは二年前に蘇轍が「逍遙堂會宿二首」其二において、離別した後に孤独に雨を聴く蘇軾を思い遣ったことを踏まえた内容でもあろう。その上で、蘇軾は来世でも蘇轍と兄弟になりたいと望んだのである。この詩に見える「未了の因」とは「夜雨對牀」であり、これが果たされるのは来世で兄弟となったときのことであるため、これ以前の「夜雨對牀」詩とは異なり、「夜

雨對牀」の実現に対して諦めが見える。それでも蘇軾は「夜雨對牀」の約束を一人で偲ぶことになるだろう未来の蘇轍の孤独を、詩を寄せることで慰めようとしたのであった。

その後、蘇軾は死罪を免ぜられ、黄州安置に遷された。蘇轍も連座して筠州に左遷され、それぞれ数年を過ごした。そして、元祐年間（一〇八六～一〇九三）には政治情勢が変わって、旧法党が政権を執ったことから中央に召還されるが、それが終わって新法党が再び政権を執ると、再び情勢が変わった。旧法党の面々は左遷されることになった。勿論、蘇軾と蘇轍も免ぜられることはなく、特に蘇軾には厳しい処分が下された。かかる当時の情勢や彼らの年齢、社会的立場を踏まえ、彼らは「夜雨對牀」の実現を諦め始めた。

元祐八年（一〇九三）九月、蘇軾五十八歳、蘇轍五十五歳のときに詠まれた蘇軾の「東府雨中別子由」詩は、かかる諦念が窺える。この詩は蘇軾の七首ある「夜雨對牀」詩のうち最後に詠まれたもので、当時の蘇軾は定州への左遷が決定していた。

庭下梧桐樹　三年三見汝　前年適汝陰　見汝鳴秋雨　去年秋雨時　我自廣陵歸　今年中山去　白首歸無期　客去莫歎息　主人亦是客　對牀定悠悠　夜雨空蕭瑟

庭下　梧桐の樹、　三年　三たび汝（なんじ）を見る。　前年　汝陰に適き、　汝の秋雨に鳴るを見る。　去年　秋雨の時、　我　広陵より帰る。　今年　中山に去り、　白首　帰るに期無し。　客去りて歎息する莫れ、　主人も亦た是れ客なり。　対牀　定めて悠悠、　夜雨　空しく蕭瑟たらん。

起折梧桐枝　贈汝千里行　歸來知健否　莫忘此時情

起ちて梧桐の枝を折り、　汝が千里の行に贈らん。　帰り来りて知る　健なるや否や、　忘るる莫かれ　此の時の情。

蘇軾「東府雨中別子由」（『蘇軾詩集』巻三十七）

一句目から八句目までは、庭先の雨に濡れた青桐と共に、自分の人生を振り返る。九・十句目で、自らの旅人のように各処を流転する状況を述べ、十一・十二句目に「対牀　定めて悠悠、夜雨　空しく蕭瑟たらん」とあるように、ここで蘇軾・蘇轍は最後になるかも知れない「夜雨對牀」を行った。その上で蘇軾はこの後に遠く隔たって「夜雨對牀」が果たされない孤独な状況下にあっても、「忘るる莫かれ　此の時の情」と呼びかけた。かかる苦境下にあるからこそ、「夜雨對牀」の思いを忘れないことが、彼ら兄弟の繋がりを改めて確認することになり、かつ、離別した者（場合によっては先立たれた者）の生きる希望となる。そう思って蘇軾は蘇轍にこのように訴えたのであろう。

この後、紹聖元年（一〇九四）になると、蘇軾は嶺南の恵州に流謫されることが決まった。ほぼ時を同じくして蘇轍も筠州に流され、紹聖四年（一〇九七）には、蘇軾は海南島の儋州に、蘇轍は嶺南の雷州に再謫されることになった。元符三年（一一〇〇）、哲宗崩御による恩赦によって北帰が許されたが、政治情勢から兄弟ともに隠棲することは叶わず、その翌年の建中靖国元年（一一〇一）七月二十八日、蘇軾は常州にて享年六十六で病没し、蘇轍はその訃報を潁昌府で伝えられることになった。

翌崇寧元年（一一〇二）閏六月二十日、蘇軾の息子たちは、蘇軾の遺体を潁昌府の隣州の汝州郟城県の小峨嵋山の山麓に移して埋葬した。そこは、蘇轍が用意したところであり、彼は二度目の祭文を

書いた際に、蘇軾を思って次のような詩を付した。

…嗚呼我兄　嗚呼　我が兄、
而止斯耶　斯に止むるや。
昔始宦游　昔　始めて宦游せしとき、
誦韋氏詩　韋氏の詩を誦す。
夜雨對床　「夜雨対床、
後勿有違　後に違ふこと有る勿かれ。
進不知退　進みて退くを知らざれば、
踐此禍機　此の禍機を踐まん」と。
欲復斯言　斯の言を復さんと欲するも、
而天奪之　而して天之を奪ふ。
先壟在西　先壟　西のかた、
老泉之山　老泉の山に在り。
歸骨其旁　骨を其の旁に帰するは、
自昔有言　昔より言ふ有り。
勢不克從　勢　従ふ克はず、
夫豈不懷　夫れ豈に懷はざらんや。
地雖郟鄏　地は郟鄏と雖も、
山曰峨嵋　山は峨嵋と曰ふ。
天實命之　天　実に之を命ず、
豈人也哉　豈に人ならんや。

蘇轍「再祭亡兄端明文」（『欒城後集』巻二十）

この詩は、やや特殊な形態であるため、前述の蘇轍の「夜雨對牀」に関する詩として挙げていないが、「夜雨對牀」詩の終着点であると言えよう。蘇轍は、嘉祐六年（一〇六一）、初めて蘇軾と離別したとき、ともに韋應物の詩を朗誦したことを追憶した。その際、蘇軾から「夜雨対床、後に違ふこと有る勿かれ」と、「夜雨對牀」の実現を念押しされたのだが、結局、天が蘇軾を奪い去ってしまった。その上、蘇軾の遺言に従って、その遺骨を亡父蘇洵の墓のある故郷の山に帰して埋葬するつもりであったが、政治情勢から不可能になったという。

そこで、次善の策として、故郷の名山である「峨嵋」の名を冠する山麓に父と兄の墳墓を隣り合わせることにした。蘇轍は泉下で父と兄に従いながら、「夜雨對牀」を実現させようとしたのであった。実際、この十年後の政和二年（一一一二）十月三日、蘇轍が享年七十四で歿した際、彼もそこに葬られた[19]。ここから、現世においては「夜雨對牀」を果たせなかった兄弟の悲しい運命を人智の及ばない「天」の定めたものと俯瞰して捉えつつ、なお「夜雨對牀」を切望し続ける蘇轍の思いが見て取れる。

終わりに

以上、北宋の蘇軾・蘇轍兄弟の「夜雨對牀」に至るまでの各時代における「雨を聴く詩」の系譜を辿ってきた。

まず、『詩経』の「風雨」では、「風雨」は実景の描写でありながら、世が乱れていることの暗喩であった。そこから、しばらくは「雨」を主題とした詩は見られなかったが、六朝時代に入ると、「喜雨詩」と「苦雨詩」が詠まれて定型化した。「喜雨詩」は、主に農事に恵みをもたらす天恩としての「雨」が降る喜びを、「苦雨詩」は、「雨」が降り続くことによって行旅や交遊が妨げられたり、時に経済や社会に大きな打撃をもたらしたりする苦しみを詠むものであった。

そこから、東晋の陶淵明の「連雨獨飲」を端緒として、雨に閉じ込められた孤独な状況下で自分の人生やこれからの処世を見つめ直す、新たな「苦雨詩」が生まれ、発展していった。

盛唐においては、「喜雨詩」もまた定型から外れ、その内容が変化していく。殊に、農事に言及せず、情景から明日への希望を暗示する杜甫の「春夜喜雨」はその好例である。また、六朝時代では目前の「雨」によって自らの過去を顧み、これからの生き方を考えたが、中唐以後には「雨」の時間軸が未来にも置かれるようになった。更に、「雨」を聴くという行為が、孤独に自省する個人的な営みから、自らの憂愁や展望を親しい人物と共有する営みへと変容した。その先鞭を付けたのが中唐の錢起の「夜雨寄寇校書」であり、白居易の「雨中招張司業宿」であった。

そして、北宋の蘇軾・蘇轍兄弟による「夜雨對牀」詩においては、より遙か遠い未来の「雨」をも詠むようになった。彼らが詠んだ計十二首の「夜雨對牀」詩を辿っていくと、様々な時間軸において兄弟で「雨」を聴くことを共有し、また、それを望んでいることが判る。但し、「乃相約早退、爲閑居之樂（乃ち早に退きて、閑居の楽を為すことを相ひ約す）」とあるように、元々の「夜雨對牀」は、ともに隠棲し、寝床を並べて「雨」を聴く楽しい未来を想像しながら、その約束を確認するキーワードであった。この典拠が中唐の韋應物が詠んだ「示全眞・元常」詩の「寧知風雪夜　復此對牀眠（寧んぞ知らん　風雪の夜、復た此に対牀して眠るを）」という詩句であり、彼らがそれに共感したことは確かである。しかし、韋應物の詩句を敢えて「雪」から「雨」に読み変えたことから、蘇軾・蘇轍は、上述の「雨」を聴く詩の系譜の一首として、この韋應物詩を見なしたと考えられる。また、未来における「對牀」を悲観する韋應物詩の内容とは異なり、時に別れの際に慨歎しながらも彼らはいつかは叶えられると楽観視していた。

しかし、政治情勢から蘇軾・蘇轍の「夜雨對牀」は果たされず、蘇轍は蘇軾に先立たれてしまう。その間、ともに隠棲する未来の望みが完全に失われた状況にあっても、蘇軾はその約束したときの思いを忘れないように言い聞かせる内容の詩を蘇轍に寄せ、蘇轍も蘇軾の死後に墳墓を並置し、それが叶うように計らった。このように、彼らにとっては、「夜雨對牀」を断念せざるを得ない苦境下にあっても、また、一方が死去したとしても、「雨」を聴く行為そのものが、兄弟の絆の象徴となったのであった。

【注】

(1) 蘇轍の詩については『蘇轍集』（全四冊、中華書局、一九九〇年）を底本とし、また、諸本を参照して適宜改めた。

(2) 幸田露伴「蘇東坡と海南島」は、昭和十四年（一九三九）の『改造』三月号に掲載され、『露伴全集』第十五巻（岩波書店、一九七八年）に収録された。本論では、幸田露伴『太公望・王羲之』（新潮文庫、一九九四年）より引用した。

(3) 矢島美都子「豐作を言祝ぐ詩―「喜雨」詩から「喜雪」詩へ―」（『日本中国学会報』第四十九集、一九九七年）。六朝時代の詩は、矢嶋氏の論攷を参照しつつ、逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩（上・中・下）』（中華書局、一九八三年）を基に算出した。

(4) 『陶淵明集』（中華再造善本、北京図書館出版社、二〇〇三年）。

(5) 陶淵明「連雨獨飲」の制作年については主に二説があり、一つは元興三年（四〇四）、陶淵明四十歳の作（興寧三年（三六五）生まれ）とする説である。田部井文雄・上田武『陶淵明集全釈』（明治書院、二〇〇一年）、松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集（上・下）』（岩波文庫、一九九〇年）、岡村繁『陶淵明　世俗と超俗』（日本放送出版協会、一九八四年）等で論じられている。もう一説は、義熙三年（四〇七）、陶淵明五十六歳の作（永和八年（三五二）生まれ）とする説で、袁行霈『陶淵明詩箋注』（中華書局、二〇一五年）、伊藤直哉「「連雨獨飲」その他――陶淵明詩に關するノート」（『櫻美林大學中國文學論叢』第十八号、

一九九三年）等に見える。陶淵明の生年も状況も異なっており、前者の説が有力である。

(6) 陶淵明「歸去來兮辭」（『陶淵明集』巻五）。また、『文選』巻四十五にも収録されている。

(7) 『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）。唐代の詩は、(3)の矢島氏と(11)の加納氏の論攷を参照しつつ、『全唐詩』を基に算出した。

(8) 錢起は「雨」を詩題とする作を十五首詠んでおり、彼の詩については『錢考功集』（四部叢刊正編33）を底本とする。以下、「蘇端林亭對酒喜雨」（『錢考功集』巻五）を挙げる。

小雨飛林頂　小雨　林頂に飛び、
浮涼入晩多　浮涼　晩に入ること多し。
能知留客處　能く知る　客を留まらせし処、
偏與好風過　偏く好風と過る。
濯錦翻紅蕊　錦を濯ひて紅蕊翻り、
跳珠亂碧荷　珠を跳して碧荷に乱る。
芳罇深幾許　芳罇　深きこと幾許ぞ、
此興可酣歌　此の興　酣歌すべし。

(9) 『杜詩詳注』（中華書局、一九八五年）。

(10) 吉川幸次郎『杜甫ノート』（新潮文庫、二〇〇八年）。この書籍は、創元社で一九五二年に刊行された。

(11) 加納留美子「夜雨對牀―蘇軾兄弟を繋いだもの―」（『日本中国学会報』第六十一集、二〇〇九年）。

(12) 那波本『白氏文集』（平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』全三冊のうち下冊に所収、同朋舎出版、一九八九年）。

(13) 『李義山詩集』（四部叢刊正編37）。

(14) 川合康三『李商隱詩選』（岩波文庫、二〇〇八年）。

(15) 蘇軾の詩については『蘇軾詩集』（全八冊、中華書局、一九八二年）を底本とし、また、諸本を参照して適宜改めた。

(16) 『韋江州集』（四部叢刊正編33）。この詩には、「元常、趙氏生」という題自注が付されている。

(17) 蘇軾はこの蘇轍詩に対して「子由將赴南都、與余會宿於逍遙堂、作兩絶句。讀之殆不可爲懷。因和其詩、以自解。余觀子由、自少曠達、天資近道、又得至人養生長年之訣、而余亦竊聞其一二。以爲今者宦游相別之日淺、而異時退休相從之日長。既以自解、且以慰子由云（子由将に南都に赴かんとし、余と逍遙堂に会宿し、両絶句を作る。之を読むに殆ど懐を為すべからず。因りて其の詩に和し、以て自ら解く。余子由を観るに、少きより曠達にして、天資道に近く、又た至人の養生長年の訣を得、而して余も亦た窃かに其の一二を聞けり。以為らく今は宦游して相ひ別るるの日浅く、而も異時退休相ひ従ふの日長からんと。既に以て自ら解き、且つ以て子由を慰めんとして云ふ）」（『蘇軾詩集』巻十五）という詩を詠んだ。以下、詩の原文と訓読を挙げる。

別期漸近不堪聞　別期　漸く近くして　聞くに堪えず、
風雨蕭蕭已斷魂　風雨　蕭蕭として　已に魂を断つ。
猶勝相逢不相識　猶ほ勝る　相ひ逢ひて相ひ識らず、
形容變盡語音存　形容　変じ尽して　語音　存するに。

但令朱雀長金花　但だ朱雀をして　金花を長ぜしめよ、
此別還同一轉車　此の別れ　還た一転車と同じからん。
五百年間誰復在　五百年間　誰か復た在らん、
會看銅狄兩咨嗟　会ず銅狄を看て　両に咨嗟せん。

詩題にもあるように、深く悲しむ蘇轍を慰め励ます内容となっている。

(18) この蘇軾詩の其二は獄中の自らの状況と残される家族に思いを巡らせながら、死後のことを蘇轍に依頼するような内容となっている。其二の原文と訓読も、以下に挙げる。

柏臺霜氣夜淒淒　柏台の霜気　夜淒淒たり、
風動琅璫月向低　風琅　璫を動かして　月　低きに向ふ。

夢繞雲山心似鹿　夢に雲山に繞りて 心 鹿に似たり、
魂驚湯火命如雞　魂は湯火に驚きて 命 雞の如し。
眼中犀角眞吾子　眼中の犀角 真に吾子たり、
身後牛衣愧老妻　身後の牛衣 老妻に愧づ。
百歳神游定何處　百歳の神游 定めて何れの処ぞ、
桐鄉知葬浙江西　桐鄉知る 浙江の西に葬るを。

(19) 三蘇墳は現在の河南省平頂山市郟県にあり、真ん中に蘇洵の衣冠塚、左右に蘇軾・蘇轍の墳墓が並んでいる。

※本論は金沢大学人間社会学域学校教育学類に提出された小谷優瑠の令和三年度卒業論文「雨を聴く詩の系譜 ―六朝から北宋まで―」を基に、指導教員である原田愛が増補修正したものである。